

## 第4回複素解析学I演習略解 (2006年10月27日実施)

担当教員 平地健吾 / TA 松尾信一郎・塚本泰三

[1]

(1)

$$\int_{|z|=1} |z-1| |dz| = \int_0^{2\pi} |e^{i\theta} - 1| d\theta = \int_0^{2\pi} \sqrt{(e^{i\theta} - 1)(e^{-i\theta} - 1)} d\theta = \int_0^{2\pi} 2 \sin \frac{\theta}{2} d\theta = 8.$$

(2)  $n \leq 0$  のときは Cauchy の積分定理より 0.  $n > 0$  のとき  $e^z = \sum_{j=0}^{\infty} z^j / j!$  は積分路上で一様収束するので

$$\int_{|z|=1} e^z z^{-n} dz = \sum_{j=0}^{\infty} \int_{|z|=1} \frac{z^{j-n}}{j!} dz = \frac{2\pi i}{(n-1)!}, \quad (j = n-1 \text{ 以外の項は } 0)$$

(3) 部分分数分解して計算する. Cauchy の積分公式を用いると

$$\int_{|z|=2} \frac{dz}{z^2+1} = \frac{1}{2i} \int_{|z|=2} \frac{dz}{z-i} - \frac{1}{2i} \int_{|z|=2} \frac{dz}{z+i} = \pi - \pi = 0.$$

(4)  $\alpha = 0$  のとき

$$\int_{|z|=1} |z-\alpha|^{-4} |dz| = \int_0^{2\pi} 1 d\theta = 2\pi.$$

$\alpha \neq 0$  のとき

$$\begin{aligned} \int_{|z|=1} |z-\alpha|^{-4} |dz| &= \int_0^{2\pi} \frac{d\theta}{(e^{i\theta} - \alpha)^2 (e^{-i\theta} - \bar{\alpha})^2} = \frac{1}{i\bar{\alpha}^2} \int_0^{2\pi} \frac{e^{i\theta} \cdot i e^{i\theta} d\theta}{(e^{i\theta} - \alpha)^2 (e^{i\theta} - \frac{1}{\bar{\alpha}})^2} \\ &= \frac{1}{i\bar{\alpha}^2} \int_{|z|=1} \frac{z dz}{(z-\alpha)^2 (z-\frac{1}{\bar{\alpha}})^2} \end{aligned}$$

となる.  $|\alpha| < 1$  のとき,  $z(z-\frac{1}{\bar{\alpha}})^{-2}$  は  $|z| \leq 1$  を含む領域で正則であることから, Cauchy の積分公式により,

$$\int_{|z|=1} |z-\alpha|^{-4} |dz| = \frac{2\pi i}{i\bar{\alpha}^2} \left. \frac{d}{dz} z \left( z - \frac{1}{\bar{\alpha}} \right)^{-2} \right|_{z=\alpha} = 2\pi (1+|\alpha|^2) (1-|\alpha|^2)^{-3}$$

である. また  $|\alpha| > 1$  ときも同様にして,

$$\int_{|z|=1} |z-\alpha|^{-4} |dz| = \frac{2\pi i}{i\bar{\alpha}^2} \left. \frac{d}{dz} z (z-\alpha)^{-2} \right|_{z=\frac{1}{\bar{\alpha}}} = 2\pi (1+|\alpha|^2) (|\alpha|^2-1)^{-3}.$$

まとめると,  $|\alpha| \leq 1$  に応じてそれぞれ

$$\int_{|z|=1} |z-\alpha|^{-4} |dz| = \pm 2\pi (1+|\alpha|^2) (1-|\alpha|^2)^{-3}$$

[2]

$|f(\gamma(t))\gamma'(t)|$  は  $I = [0, 1]$  上有界なので  $< R_0$  なる  $R_0$  がある.  $z, w$  を  $\mathbb{C}$  の元とし,  $z$  を任意に固定する.  $C = \gamma(I)$  とおくと

$$\left| \frac{1}{(\gamma(t)-z)(\gamma(t)-w)} \right| < \frac{1}{\text{dist}(z, C)\text{dist}(w, C)}$$

であり  $\text{dist}(w, C)$  は  $w$  に関する連続関数なので、ある  $\epsilon_0, R_1$  があって、 $|z - w| < \epsilon_0$  なら

$$\frac{1}{\text{dist}(z, C)\text{dist}(w, C)} < R_1.$$

$\delta$  が任意に与えられたとき、 $\epsilon_1 R_0 R_1 < \delta$  なる  $\epsilon_1$  をとると、 $|z - w| < \min(\epsilon_0, \epsilon_1)$  ならば  $|F(z) - F(w)| < \delta$  である。

$F(\infty) = 0$  としたとき  $\infty$  でも  $F$  は連続になる。実際  $\delta$  が任意に与えられたとする。  $C$  は有界なので、ある  $R_2$  があって、 $|z|$  が  $R_2$  より大きいとき  $\text{dist}(z, C) > R_0/\delta$  となっており、このとき  $|F(z)| < \delta$ 。

[3]

$\sin$  のテーラー展開を用いると  $z \neq 0$  のとき  $f(z) = 1 - \frac{1}{3!}z^2 + \frac{1}{5!}z^4 - \dots + (-1)^n \frac{1}{(2n+1)!}z^{2n} + \dots$  となる。しかし、 $z = 0$  でも、この等式は成立する。よって、この等式の左辺は収束半径は  $\infty$  だから、 $f$  は  $\mathbb{C}$  上の正則関数を定めているといえる。

[4]

(1) Cauchy の積分公式より次を得る。

$$\frac{1}{2\pi i} \int_{|\zeta|=r} \frac{f(\zeta)}{\zeta - 0} d\zeta = f(0).$$

この左辺の  $\zeta$  を  $\zeta = re^{i\theta}$  として表せば求める等式を得る。

(2) 答えはつぎの通り。

$$\begin{aligned} \iint_{|z|\leq R} f(z) dx dy &= \int_0^R \int_0^{2\pi} f(re^{i\theta}) r d\theta dr && \text{(極座標表示)} \\ &= \int_0^R r \int_0^{2\pi} f(re^{i\theta}) d\theta dr \\ &= 2\pi f(0) \int_0^R r dr && (\because (1) \text{より}) \\ &= \pi R^2 f(0). \end{aligned}$$

複素解析学 I サイトでは演習で配布するプリントや講義メモを載せています:

<http://www.ms.u-tokyo.ac.jp/~hirachi/courses/complex1-2006/>

(解答作成: 塚本泰三)